

## 四人の恩師

第十三回生（昭和六年卒）大内 力

戸山小学校に在校したのは一九二五年（大正一四年）から三一年（昭和六年）までの六年間ということになる。何しろもう七〇年近くも昔のことなので、何もかも記憶は風化し、おぼろげになっていることはやむをえない。

この間担任としてお世話になったのは、たしか四人の恩師である。これらの先生方にたいする記憶もずいぶん覚束ないことになっているが、ともかくおひとりずつに覚えておくことも書き記してみよう。

一年生のときの担任は木谷先生であった。この先生はのちに改名されたはずだが、当時は義保というお名前ではなかったかと思う。当時お幾つぐらいだったのだろうか。子供からみるとどの先生もお年寄りにみえたが、多分三〇歳ぐらいだったのであろう。口ひげをたくわえておられたが、やさしい先生だった。

といつても当時の私は、何しろ主治医の先生から、とても一〇歳まではもちませんと太鼓判（！）をおされて母親を悲嘆に暮れさせていた病弱児だった（もちろん当時そんなことを知っていたわけではない。後

年母からきいた話である）。学校にもめつたにはゆけず、たしか三分の二ぐらいは欠席であった。運動会とか遠足とかにはむろん参加できなかった。

そのせいか木谷先生との個人的接触についてはほとんど何も記憶がない。多分、優しい先生は死にかけでめつたに顔をみせない生徒もちゃんと見守っていて下さったのだろうが、すべては茫漠としている。

この先生は、私が二年生になるとき、たしか満州（中国東北部）のどこかへ転任された。その後数年は、私の方から年賀状をさしあげるとお返事を下さったが、いつの間にか消息が絶えてしまい、その後のことは何もわからない。おそらくもうずっと前に亡くなられたのであろう。

二年生の時の担任は仲勝一先生だった。銀ブチ眼鏡の中年の先生で、ベテランらしくいつも面白い話をされて子供たちを喜ばせて下さった。もっとも時にはこわい先生でもあった。ある時、戸山小学校から盛好堂の方にゆく道の電柱の何本かに、いたずらっ子が「仲先生のバカ」と落書きしたのが見つかるという事件があった。犯人は結局わからずじまいだったが、われわれはさんざんお小言をくらい、ついに雑巾をもって落書きをきれいに消す役目を仰せつかった。



先生は大分の産であった。多分そのなまりだったのだろう。父母会で先生に呼び出された私の母親は、帰ってきて、あの先生はお宅の力君といわないで、ゴタクの力君といわれるんだよ、といっておかしがっていた。相変わらず弱虫で学校を休んでばかりいた私は、在校中とはくに先生に接触することもなかったが、われわれが三年になるときは代々木幡ヶ谷の方に転校された。

先生とお親しくなったのは、むしろ中学に入ってからである。

どういうまぐれ当りだったのか、私は当時難関といわれていた高師附中（今の筑波大付属）の入試にパスした。同級生からは一人だけだった。多分そのご褒美だったのだろう。先生は初台の近く、玉川上水のほとりのお宅に食事に呼んで下さったことがあった。奥さまのお世話でスキ焼きを頂いたような記憶がある。

その後何度か先生のお宅に伺ったが、いつの間にか音信が絶えていた。ところが戦後、昭和二四、五年であったろうか、まだ駆け出しの東大助教授であったが、招かれて大分に講演にいったことがあった。そのとき、新聞広告か何かで私の名前を見付け

られたのである。私の宿舎へ先生がたずねて来て下さった。一〇年ぶりぐらいの再会だったろう。先生はともかく一人前になったかつての泣虫小僧のことを大変喜んで下さったし、私もすこしは先生にご恩返しをしたような気になったことであつた。

その後、お手紙を頂くことはあつたが、ふたたびお目にかかる機会もないままに先生は亡くなられた。奥さまは今もご健在で宇佐市におられる。いつか「とやま」を送つてさしあげたら、大変喜んでお手紙に思ひ出を書いて下さった。一度おたずねしたいと思ひながらまだ果たせないでいる。

三年生の前半の担任は宮城先生という方だつた。お名前は忘れてしまつてどうしてかと思ひ出せない。すでに白髪で顔にもしわが多く、子供からみると大変お年寄りのようにみえた。といつても実際は五〇歳前であられたのであろう。

この先生とはきわめて短いおつき合ひだつた。例によつて長く学校を休んで、やつと登校できるようになつて出席してみたら、仲先生はすでにおられず宮城先生がお代りになつておられた。なぜ休んだのかというようなことを長々と訊問——子供心にはそんな感じだつた——された記憶がある。その後じき夏休みになり、秋にはもう先生は転校されていた。

そしてそのあとをつがれたのが松崎昌夫先生で、先生には卒業まで三年半お世話をお願いした。当時先生は、宮城先生とは反対に、師範学校を出て間もなくという若いはり切つた先生であつた。

水泳選手として鍛えられたがっしりとしたお体で、日に焼けてのトビ色ではあつたが、鼻すじの通つたなかなかの好男子だつた。その整つた、日本人ばなれしたお顔が、当時喜劇王といわれたアメリカの映画俳優バスター・キートンに似ているといふので、われわれはさつそくキートンという仇名を奉つた。



松崎先生からは学科以外にもずいぶんいろいろのことを教わつた。先生ご自身スポーツマンだつたから、運動の上手な子供たちはその面でもご指導を受けたことだろう。しかし相変わらず病気がちだつた私は体操さえしなれば休んだし、遠足にもめつたに参加できなかつたから、そちらの面では縁なき衆生であつた。あとになつて一番助かつたのは、五年生になつた頃から、先生が課外にローマ字を教えて下さつたことである。英習字もやらされた。

この方は生来の悪筆が救われたわけではなかつたが、ローマ字の方は中学に入つて

から英語を学ぶのにずいぶん役に立つた（当時の附属中学では附属小学校から進学してきた級友は、すでに、五年生の時から英語の初歩を習つていた。他の小学校から入試を受けて入つた私のような者は、一年生の間に英語で進学組の連中に追いつくのはなかなか大変だつた）。

また先生は、職員室にはあまりゆかれず、教卓の上にいるいろいろな書物を積んで休み時間も教室で過されることが多かつた。そこでご自分できれいな絵入りの小冊子を作つては私たちに回覧された。それはオデッセーなどの話だつたが、やや大げさにいえば、それが私などには文学に目を開かれたひとつのきっかけだつたように思う。

六年生になつたときには、先生は時々私を呼び出されて、君はもうちよつと勉強しないといふ中学に入れないよ、と注意して下さつた。しかし病弱なことをいい口実にして、勉強ぎらいの私は学校の勉強はいい加減にして、好きな本ばかり読んでいた。それでもともかく附属中学にもぐり込めたのだが、附属の入試は当時の府・市立中学の入試より数日前に終り発表もすんでいた。府・市立中学の入試当日学校にいったら、級友の大部分は入試にいつていて、教室はガラんとしていた。私は滑りどめに願書を市立中学にも出してはいたが、もちろん入試

にはいかず、珍しく得意満面で学校に出ていったのである。先生は、よくやったなとほめて下さり今日は自習にしようといわれて、二、三人のこのった級友と一日教室で本を読んだり、ダべったりされていた。一生のうちで先生と過した一番楽しい日であったような気がする。もっともそれは一日限りで、翌日から熱を出して寝込んでしまった私は、ついに卒業式にも出られず欠席のまま戸山小学校を卒えたのであった。

卒業後も、松崎先生はクラス会にはかならず出て下さったので、亡くなられるまで毎年のように先生にはお目にかかる機会があった。

結核の初期症状のために結局一年浪人生活を余儀なくされた私が旧制一高に入ったとき、先生は大変喜んで下さり、その直後のクラス会では「ああ玉杯」を歌えと要求された。一年早く五中から一高に入っていた若野精二君に助けられながら、覚えてたの「玉杯」をご披露に及んだことも懐かしい思い出である。

戦後になって、まだ私が助教授の頃であったろうか、たしか先生のご依頼で新宿区の小学校（新制中学も含んでいたのかもしれない）の先生方の集りで講演をしたことがあった。そのあとクラス会でお目にかかった折、このあいだはいい話だった、皆、

「やんやの喝采だった」とほめて下さった。先生はなかなかほめ上手でもあられたのである。

先生が亡くなられてからもう二〇年位も経っただろうか。当時、私は大学の用事がむやみに忙しくてご葬儀にも参列できなかつた。申しわけないことを思っている。スポーツマンであられたのに先生は割に若くして亡くなられた。

子供の頃死にかけた私は、高等学校に入った頃結核とおさらばしてから急に丈夫になり、多分先生より大分長生きをした勘定になった。不思議な巡りあわせである。人生は人と人の出会いであるという。子供の頃すぐれた先生方に出合えたことは、私の一生の幸せであった。

（平成二年・とやま第十二集）